

三河本苑信徒の皆様へ

50年記念誌編集活動へのお礼とお願い

令和3年4月13日 本苑長 加藤三樹

常日頃、本苑活動にご協力をいただいております。誠にありがとうございます。おかげ様で、来
年本苑設立50周年に向けての記念事業であります、新しい神の家建設と50年記念誌発行の
活動も順調に進んで来ています。

50年記念誌におきましては、次の3つを発行目的として活動を推進しています。

1つ目の目的は、20年記念誌以降の「本苑活動の歩み」を、後世に記録として残していくこと
です。併せて、先人の方のご苦勞、諸行事に活躍をされた方の思いを生の声で残していきます。

2つ目の目的は、「神の家建築の経緯」を語ることです。今回の新築の経緯を、建物と合わせ
て、どういう思いで、どのように進めて来たのかを語りたいと思います。

3つ目の目的は、10年後に向けた「本苑活動のありたい姿」を描くことです。ありたい姿
を実現するために、何が課題で、そのために何をしていくのかを未来志向で考える、その第一
歩にしたいとの強い思いからです。

この3つ目的を達成するため、昨年、誌面の構成を決定しました。そして今年に入り、決定
した誌面構成に基づき、関係者へ記事の作成をお願いいたしました。記事作成へのご協力、誠
にありがとうございました。記念誌完成は来年5月の予定です。引き続き、役割分担して、皆
で和して、編集活動を進めていきます。

今回、三河本苑の皆様へ、一つ確認したいことがあります。作成していただいた記事に基
づき、掲載する写真を編集委員で検討しています。今までに撮影した写真から選択する、ま
たこれから撮影するに当たって、もし、個人的に写真掲載を好まない方がおられましたら、
お申し出をお願いします。これから写真を選択、撮影するに当たって考慮いたします。

**個人的に写真掲載を好まないお方は、分所支部長を通して、5月31日までに
三河本苑事務局へ連絡をお願いいたします。**

【問い合わせ・連絡先】 三河本苑 電話番号：0533-69-7518
又は、0566-76-1104 牧まで

三河本苑だより

6月号

2021・6 No.469

(発行者)

大本三河本苑

〒443-0031

蒲郡市竹島町28-5

TEL 0533-69-7518

FAX 0533-69-1455

お知らせ

市杵島姫命様の春季大祭は
六月に祭典いたします

祭務部より

「言葉」と「言霊」 そして善言美詞

特任宣伝使 芝田豊海

皆さんは日常生活において、言葉によるトラブルを
起こしたことがありますか。「トラブルを起こさない」
「自分の意志を伝える」為にも言葉使いは大切です。
そして、言葉と言霊には善言美詞が不可欠である。

●言霊と言語

言霊天地を動かすとい
うことは、瑞霊の言霊のこ
とである。言は三つの口と
書く。言語の語は吾の言
と書く。人間は男女ともに
五つの口を持つている。言
霊は天地を動かすけれど、
言語は天地を動かすわけ
にはゆかぬ。 出口王
仁三郎(水鏡よりP27)

以前、本部研修会にて
『「感謝祈願祝詞」の解
説』について、串崎哲氏
の講話を受けました。そ
のを一部を紹介します。

●「感謝祈願祝詞」より

和魂の親みによりて
人々を恵まず、改言改
過、悪言暴言なく、善
言美詞の神嘉言をもつ
て神人を和め

・よし人に親しむとても
悔いることしらずばつ
いに人に恵まる
・あやまちを悔いる心し
かたければ天の下には
悪むものなし

神典に所為「改言」は、
即ち改過無悪の意味であ
る。過ちが改まれば、言も
自然に改まるものである。
(出口王仁三郎著作集第一
巻「本教創世記」)

言霊の妙用は一声よく
天地を振動し一音よく風
雨雷霆(ふううらいてい)
を駆使し叱咤する絶対無
限の権力あれども、これ
を使用する人々の正邪に
よりて、非常なる怪庭の
あるものである。昨日ま
でバラモン教を開き、誤
りたる信仰を続け、心は
拗(ねじ)け、魂は曇り、言

6月の行事

●20日(日)

本苑六月月次祭

●26日(土)～27日(日)

東海教区

特任宣伝使研修会

(中止)

7月の行事

●18日(日)

本苑七月月次祭

●25日(日)

誠心会万祥殿献勞

(中止)

●未定

少年夏期学級

(中止)

霊の曇りたる者は、いかに
完全に、能弁に善言美詞を
述べ立つればとて、万有一
切に対し毫松(ごうまつ)
も、その感動を与えざる
は、実に神律の厳として冒
すべからざる所以である。
また魂よく研げ慈愛に富
み、心中常に寛容の徳あ
る捨子姫の言霊は、前者
に比して極めて簡単なも
のであった。されども暴
悪無道の醜(しこ)の大蛇
(おろち)も、厳として動
かすべからざる捨子姫の、
清明無垢の膺下丹田より
迸(ほとばし)れる、万有
愛護の至誠より出でたる
言霊には、いかに頑強

なる邪神といえども、到底これに抵抗する余地なく、漸（ようや）く心と和らぎ、浪静まり、雨は止み、あたりを包む黒雲も次第に、言霊の権威によつて払拭（ふつ）しよくされてしまったのである。これにしても神界の最大重宝たる言霊の神器は、混濁せる身魂の、容易に使用し得べからざることを知らるるであらう。（霊界物語三十巻第十一章「言霊の妙」P141）

●真の自由は囚われぬこと

人間を華やかに愉快にするものは言葉である。言葉をつつしむべしということとは、虚言悪口（きょく）きよげんあつこう（たぐい）はださぬということであつて、決して強いて口数を少なくせよということではない。

善言美詞はできるだけ盛んに用ひべきである。別にさしつかえないのに、言いたくとも言わずに、腹へ溜めておるような人間は、神より遠ざかる

者である。『信仰覚書』第一巻P40）

●肯定の言霊、否定の言霊

人をやわらげ睦まじむるものは言霊である。

いくら言霊を用いたとて、決して減るものでも、損のいくものでないから、われわれは生涯のうちに、できるだけ多く善言美詞を使用して、その効果を發揮すべきである。

人間が人間を嫌うということとは、ぜんぜん変態である。厭世家（えんせい）といふか、偏見哲学者などには、この類（たぐい）の人が往々あるが、これは心身のどこかに欠陥があるからです。

生が愉快であり、人がみな親友に見えるのが自然なのである。われわれは、大いに言霊の媒介によつてお互いに睦み、愛し合うて行かねばならぬ。

（『信仰覚書』第一巻P245）

●善言は善意を喚（よ）ぶ

「ほめられて怒る者はなく、けなき

れて喜ぶものはない。暴言悪語は人を後悔せしむるものはない。たとえ大悪人にしたところで、その素質のどこかには神を宿している。善言美詞は、やがてその神を引き出してやることになるのだ。相応の理によつて、善言は善意を喚び起こし、悪言は悪意を呼び起こすことになる。」

（『信仰覚書』第一巻P135）

●真の善言美詞である祝詞を

「『大本神諭』、『霊界物語』を毎日いただき、しっかりとお腹にいれ、真の善言美詞である祝詞を清い言霊で日に何度も奏上させていただき、三千世界を祓い清め、世界中の人々がそろつて幸福に暮らせる安心立命の世の中が一日も早く来ますように、ともに祈らせていただきたく存じます。」（『教主ご教示集 第一巻―出口紅五代教主―「開祖大祭ご挨拶」平成十五年十一月六日」

「神への恋愛」

「神の国」

特任宣伝使 松永孝司

昭和7年9月

聖師曰く「信仰は恋愛の心であるということとは、かねて『霊界物語』その他で示されているが、その恋愛の程度のいかに切実なるものであるかを、多くの人は知らない。これを一つの理想くらいに考えているのだから、ためである。そんなものではない。

渾身の真心をささげて神さまに溶け入るときそれは相愛の男女の抱擁に幾十倍するかわからぬほどの、心からなる幸福を享受するのである。天消地滅どころのものではない。実際、筆や言葉では言い表すことができない底（ぞこ）のものである。思つてもみよ、相手は至純至美なる神さまである。

純潔なる処女を形容し天女のようにだとよく人がいうが、どうして、比較にもなんにもなつたものではない。現世の美と天界の美とは標準が違ふ。ひとたび天人、天女の相貌に接したものは、現界におけるどんな美人を見ても美男を見ても、美しいとは感じられない。それはあたかも太陽の前の電灯のようなものである。また美女の形容に、竜宮の乙姫さまに金覆輪（きんぷくりん）をかけたような美人などというが、天人界に比べれば、竜宮界の美女たちは、その気品において遠く及ばないものである。天人界は実に美しいものである。再び言うが、信仰の極致、神さまに溶け入るとき的心境は、言語に絶した至美、至善、至貴なるものである。その心境を味わえば徹底した信仰とはまだいいえないのである」

天国に行った記憶がないので、理解することは困難であるが、何となく解ることである。

しかし、このような心境になることは大変なことである。



「上手でも下手でも構わぬ」

月次祭運営部長 高井 郁代

三河本苑の吉良歌

会に入り、月に2首を目標に短歌を作っています。以前は、月に一度集まり歌会を開いていましたが、コロナウイルスが流行してからはリモートにて本部の佐々木先生に添削していただいたり、色々教わりながら、楽しい会話と共に1

時間ほど開催しています。

新人で下手なのですが、参加するのはとてもワクワク楽しいです。初心者の私にとって毎月2首を詠むのもとても大変ですが、下手なりに出来た時は嬉しいです。

「見て、感じて、詠む」、「言葉を飾らず、見たままズ

バリ詠う」、「自分らしい物の見方、感じ方が大切」など、色々教えて頂きました。

一見単純なようですが実践するのは難しいです。

「上手でも下手でも構わぬ」と言われる聖師様のお言葉に勇気を頂き、細く長く楽しみながら続けていきたいと思ひます。

興味を持たれた方は、お気軽に声をお掛け下さい